



The 80th Anniversary

おかげさまで
創立80周年
広島国際学院

超えて
誉教授 解剖学者
養老孟司



創立80周年記念行事

盛大に開催

特集 創立80周年盛大に祝う	
記念式典	2
特別記念講演(養老孟司先生)	3
祝賀会	3
環境の世紀を見据えて	工学部 4
先駆者のアイデアを積極的に学ぶ	情報学部 5
地域に根ざした取り組み	現代社会学部 6
在学生・卒業生ともに活躍	短期大学部 7
高校から発信	8-9
町民グラウンドゴルフ大会開催	10
全日本吹奏楽コンクールに初出場	10
第40回高城祭	11
秋田国体で見事準優勝	
— 自転車競技部・野中君 —	11
講演会「ヒロシマの継承」	12
連続講座「情報社会とメディア」	
— 朝日新聞広島総局と共催 —	12
今後の主な行事予定	12

広報

第72号

平成20年1月1日発行

URL <http://www.hkg.ac.jp/>

創立80周年盛大に祝う



10月31日(水)、リーガロイヤルホテル(広島市中区)にて学校法人広島国際学院創立80周年記念行事を開催しました。会場には朝から招待者が続々と詰めかけ、晴れやかな笑顔と創立80周年を寿ぐ声が広いホールに溢れていました。約700人が一堂に会する喜ばしくも厳かな雰囲気のもとで式典が始まり、藤田雄山広島県知事をはじめとする来賓の方々から温かいお祝いの言葉が寄せられました。また、学術奨励基金として学院に寄付をされた森英子先生に感謝状が贈られました。式典に続いて東京大学名誉教授の養老孟司先生による記念講演が行われ、さらに祝賀会も開かれて喜びをともにしました。

【記念式典】

◆来賓祝辞◆



藤田知事



石田先生



山中先生

広島県知事 藤田 雄山氏

学校法人広島国際学院の創立80周年の記念式典がこのように盛大に開催されることを心からお喜び申し上げます。この記念すべき年を飛躍の年とされ、よき伝統を受け継ぎつつ時代の流れに柔軟に対応し、本県の次代を担う人材の育成に一層のご尽力を賜りますようお願い申し上げます。学院のますますのご発展と関係者のご健勝ご多幸をお祈りします。

日本私立大学協会で・四国支部長 石田 恒夫氏

日本私立大学協会を代表して、心からお喜び申し上げます。歴代関係者は申すに及ばず、鶴素直先生、今村詮先生を中心とする関係各位のご努力の賜物と拝察し、衷心より敬意を表する次第です。また鶴素直先生には協会役員として尽瘁いただき、改めて厚く御礼申し上げます。学院が一層の躍進を遂げられますことを心よりご祈念申し上げます。

広島県私立中学・高等学校協会会長 山中 幸平氏

昭和2年設立された広島高等予備校が大学・短大そして高等学校を有する総合学園に発展され、80周年の記念式典を開かれますことを心よりお慶び申し上げます。建学の精神を具現しよう、守り抜こうと言う情熱があれば、さらなる発展は間違いありません。本日は誠にありがとうございました。

◆挨拶◆

学校法人広島国際学院 理事長 鶴 素直

広島国際学院創立80周年の式典をこうして盛大にお祝いできることに心から感謝申し上げます。建学の精神「教育は愛なり」を心に学生一人ひとりを大切にする教育研究活動を展開し、優れた人材を輩出して、わが国の文化の向上と科学技術の発展に貢献したいと願っています。今後とも一層のご指導とご支援を賜りますよう切にお願い申し上げます。

大学・短大 学長 今村 詮

大学、短大とも大勢の卒業生が巣立ち、とりわけ地場産業で活躍されて高い評価を得ております。卒業生の皆様方に改めて深い敬意と感謝の意を表す次第でございます。学生諸君がより満足できる教育システムを構築して本学の特色とすべく日夜努力しているところです。今後とも相変わらずご指導ご鞭撻をお願いいたします。

高等学校 校長 長野 政義

建学の精神の下、一人ひとりを大切に、明るく楽しい感動に満ちあふれた学校をめざし取り組んでいます。80年という歴史と伝統を心にとどめ、100周年150周年に向かって皆様に堂々と誇れる学校を目指して頑張っていく所存でございます。今後とも皆様方のお力添えを賜りますよう切に願ひ上げます。



鶴理事長



今村学長



長野校長

特別記念講演「『バカの壁』を超えて」

講師：養老 孟司先生（東京大学名誉教授・解剖学者）



式典の後、養老孟司先生の特別記念講演を行いました。ベストセラー『バカの壁』をはじめ、雑誌・テレビなど旺盛な活動で知られる先生の登壇に、満場の聴衆からは大きな拍手がわき起こりました。豊富な経験に基づく博識に加え、独特のユーモア溢れる語り口が聴く者を魅了しました。講演の要旨は次のとおりです。

脳を理解しようとする時、基本的には意識を問題にします。意識とは何かということ秩序活動です。秩序とはランダムではないということです。意識的にランダムなことは絶対に出来ません。物理化学的に秩序活動を行うと結果として無秩序、エントロピーが生じますので、これを解

消するために眠るわけです。よって意識はしょっちゅう途切れます。

現代社会は非常に意識的な社会で、意識が作り出した社会です。自然はほとんどない。自然とは意識が関係しない世界です。意識は秩序を要求しますので、秩序的な社会になります。これを普通には「文明」と呼びますが、文明社会にはいろいろな規則があって窮屈ですから、文明的に振る舞うと基本的には不幸になります。

文明は秩序活動ですが、文明の作り方には二つあります。一つは人間自身が意識的に自分をコントロールすることです。もう一つは外部エネルギーを導入して社会の中にだけ秩序を作り出すことです。この場合自然界に無秩序が放出されます。これがエネルギー問題です。エネルギー依存の文明も行き詰まりつつあります。炭酸ガス削減など盛んに議論されていますが、「皆で一緒に減らしましょう」という日本型の理屈は通用しません。世界も日本と同じように考えているわけではないのです。「あなた方に無駄遣いさせるぐらいなら私の方が余程上手に使います」と主張すべきです。

脳は五感から入力し、脳の中で演算して運動として出力します。脳から出て行くのは身体の動きだけです。ただし、人間は演算の場所に意識というものが発生します。感覚が世界の違いを検出するのに対し、意識は典型的に同じにする作用をします。人間の意識の働きを突き詰めていけばお金と言葉に尽きるというのも、根本的には「同じ」という働きです。ただし、世界が等質に近づいているのを見てこれが人類の基準だと思ったり、自分と違う考えを即座に否定したりしないよう気をつけなくてはなりません。人体は常に物質が入れ替わっており、寝る前の自分と起きた後の自分が同じ保証はないのに、同じ自分だと信じて自我を強調するのも意識の働きです。西洋文明つまり一神教文明はこれが基本で、自我を前提にします。一神教がなぜ発生するのかもわかるような気がしますが、あとはご自分で考えていただきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

【祝賀会】

式典、講演会に続いて祝賀会が開催されました。鶴理事長は開会挨拶の中で、高等学校の吹奏楽部が全日本吹奏楽コンクールに中国地方代表として初めて出場したことを紹介しました。続いて来賓からの祝辞がありました。林正夫県議会議長は「社会経済情勢が急激に変化する中で、広島国際学院が積極的に人材育成に取り組んでいるのは心強い限りです。県議会も新たな『教育県ひろしま』の創造に向けて努力しますので、今後とも社会に貢献する人材の育成にご尽力くださいますようお願いいたします」と述べられました。また小出秀文日本私立大学協会事務局長も「これからは高度化の時代、個性化の時代です。日本の伝統的な精神、文化、発想をもって世界の文化に貢献しなければならない時期がいよいよ来ていると思います。学院の出発点に立ち返り、教職員一同結束して進んで行かれるよう期待いたします。広島国際学院の一層の躍進をご祈念申し上げますと存じます」と述べられました。角廣勲広島銀行取締役頭取の音頭で祝杯を掲げた後、吹奏楽部の演奏を楽しみながら和やかな歓談が繰り広げられました。



乾杯

環境の世紀を見据えて

工学部

シンポジウム「グリーン経済を成り立たせるための10の提言」に参加 工学部長 遠藤 敏郎



パネルディスカッション

NPO法人環境文明21 (<http://www.neting.or.jp/eco/kanbun/>)が主催する「グリーン経済シンポジウム in 広島 グリーン経済を成り立たせるための10の提言」が、11月23日(金)に本学立町キャンパスで開催されました。本学学生や教職員に加え、高校生さらには社会人と100名を超える大勢の方が参加。環境問題に対する市民の関心の高さが改めて伺えました。

環境文明21は地球環境の維持・保全、あるいは循環型社会の実現に向けた経済システム(グリーン経済)の構築に向け、部会組織による調査・研究を通して多くの提言を行ってきました。今回のシンポジウムでは、最初に環境文明21の共同代表である加藤三郎氏(環境庁地球環境部の初代部長)と藤村コノエ氏が活動状況報告と問題提起を行いました。続いて会場を加えたパネルディスカッションに移りました。両共同代表者に(株)カンサイ社長の川本義勝氏、地域環境インストラクターである岩地加世氏と私がパネラーとして加わり、会場と意見を交換しました。本学学生や高校生からも意見が提出されました。

産業界の動きを把握することは、自らの将来を決める上でも重要になります。学生ひいては高校生にとっても思いを馳せる部分があったことと信じます。

欧州環境関連技術視察を終えて

バイオ・リサイクル学科 講師 渡邊 真彦

今回2007年度広島県環境ミッションに参加し、11月20日より月末までドイツ、スイス、フランスの3カ国を訪問しました。バイオマスの燃料化、廃棄物を活用した路盤材技術、家電リサイクル、土壌浄化技術など、企業や地方自治体による最新の取り組みを視察し、最後にパリで行われた環境関連技術メッセ Pollutec Horizons 2007に参加しました。



写真はドイツにあるガス発電施設の巨大な高温動作型燃料電池です(体の大きな筆者が小さく見えます!)。ここでは、バイオマスからのメタン発酵ガスが発電に利用されています。世界的にも珍しいバイオガスによる燃料電池発電の実用化が非常に早いスピードで行われているのに驚きました。その背景には、環境負荷が少ない技術で生成した電力を、最大で通常価格の約3倍という高値で売電できるという実情があります。大きなインセンティブにより、小さな組織を伸ばす政策システムの有効性を再認識できました。

10日間で3カ国、計12社の訪問に加え、メッセへの参加と非常にタイトな日程でした。しかしながら、環境分野の専門家で構成したグループメンバーと十分な時間をかけて意見交換し、良い人間関係が形成できたことは、私にとって最も大きな成果だと思っています。

大学院生奮闘記

機械工学科 准教授 高津 康幸

本学大学院工学研究科機械工学専攻修士課程1年の竹原健君の学会での活躍について報告させていただきます。

時間は少々さかのぼり竹原君が学部生の時、宗像教授より“今年3月に徳島大学で日本機械学会主催の卒業研究発表会が開催される。竹原君は大学院に進学するのだから発表してみては”という申し出を受けたことから、竹原君の奮闘が始まりました。卒業研究発表会は、中国・四国地区の大学から297件の申し込みがあった盛大なものでした。竹原君は「多孔質内乱流遷移に関する研究」という題目で威風堂々と発表を行いました。また発表のみならず、発表会の進行をつかさどる座長という大役を務めたことは、竹原君にとって貴重な経験であったようです。



実験装置と竹原君

5月には長崎で開催された第44回日本伝熱シンポジウムに参加。日本の熱工学の大家の前で「多孔質内水平気液二相流に関する研究」についてポスターを用いて説明し、白熱したディスカッションを交えました。なお、この会議の際に用いたポスターは、中野キャンパス6号館3階の伝熱工学研究室前に飾ってありますので興味ある方はご覧下さい。この他、米国機械学会が催す最大の国際会議IMECE2007 (<http://www.asme.org/congress/>)へ論文“Flow Characteristics at Low Quality for Horizontal Gas-Liquid Two-Phase Flow through Porous Media”が受理され、現在は日本機械学会論文集への論文投稿に向けて日夜頑張っています。

情報学部 先駆者のアイデアを積極的に学ぶ

ゲームクリエイターの仕事とスキル

去る10月7日(日)、来春の情報デザイン学部の誕生を記念する特別講演会「ゲームクリエイターの仕事とスキル」を立町キャンパスで開催しました。講師としてゲーム制作会社Q-GAMES(<http://www.q-games.com/>)の吉田謙太郎さん、富永彰一さん、西川龍司さん(本学卒業生)をお招きしました。話題はゲーム制作の流れから、制作に携わる人間に必要な知識や技術など多岐にわたります。実際に制作したゲームや制作現場の写真も交えながらお話しいただきました。情報デザインの分野で際際注目を浴びるゲーム業界、その最先端で活躍する方からホットニュースを伺えるとあって、聴衆は熱心に聴き入っていました。講演に続いて行われた座談会でも活発な議論が交わされました。会場にはゲーム体験コーナーも設けられ、ご来場くださった大勢の方々にQ-GAMES社のゲームを楽しんでいただい、盛況のうちに講演会を終えることができました。



第一線で活躍する方々との座談会



学生のほか、市民や美術ファンなど大勢の受講者が集まった

広島市現代美術館・情報デザイン学科共催

佐々木悟郎の世界

去る10月20日(土)、イラストレータ佐々木悟郎氏の講演会およびワークショップを広島市現代美術館で行いました。佐々木氏は、郵政省の記念切手や劇団四季のプログラムイラスト、浅田次郎氏の著書のブックカバーなど数多くの作品を手がけ、イラストを見ればどこかで見たことがあると気付く人も多いことと思います。

午前中はスライドショーを中心に、アメリカ時代のイラストも含めた作品のアイデアやコンセプト、制作プロセスなどを織り込んだ講演会。午後は佐々木氏と共に実際に水彩でイラストを描くワークショップでした。本学の学生も含め、一般市民、美術館友の会のメンバーなどが参加し、活気にあふれた楽しい催しとなりました。



佐々木先生の筆先に見入る受講者

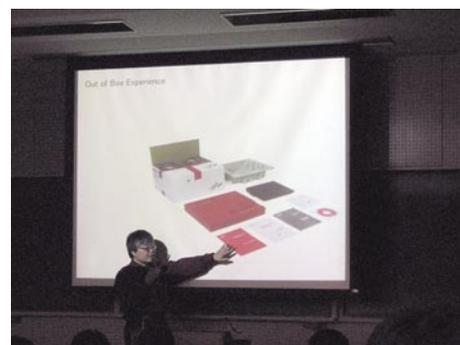
教育講演会

スマイルな体験を呼び起こすデザイン

10月23日(火)、千葉工業大学工学部デザイン科学科の山崎和彦教授をお招きし、教育講演会「スマイルな体験を呼び起こすデザインーSmile Experienceー」を中野キャンパス611教室で開催しました。

山崎先生は本年3月まで日本IBM(株)ユーザーエクスペリエンス・デザインセンターにデザイナー及び技術理事として勤務。ユーザー中心デザインの視点から、コンピュータをはじめとする多くの商品開発に関わって来られました。

講演では使いやすさのためのデザインやユニバーサルデザインについての手法など多くの事例を紹介。さらに、絵を描くワークショップでは、デザインにおける発想の指導をしていただきました。受講生からは、IBMの多彩な仕事に対する驚きや、美しいだけでないデザインの重要性に気付いたという感想が寄せられました。



ユーザーが使いやすいデザインとは…図を交え解説

地域に根ざした取り組み

現代
社会学部



講演会(二宮氏)

カーブを愛する二つの講演会

—現代社会学部 秋の特別企画—

10月8日、「スポーツの秋」の特別企画として「カーブを愛する」をキーワードに、二部構成の講演会を開催しました。第一部は、迫勝則学部長が「前田の美学」と題し前田智徳選手の野球哲学を、そして第二部では、著名なスポーツジャーナリスト二宮清純氏が「カーブへの提言」と題して、長年のカーブファンであるお二人が積もる想いも込めて、熱っぽく語りました。130名余の満席のお客様は、講師の言葉に一喜一憂しながら熱心に耳を傾けていました。広島カーブへの想いも新たに、強いエールを送ろうという雰囲気が会場を包み、ファンにとっては何物にも代え難いひと時となりました。



懇談会(二宮氏・迫学部長)

海田町の南米出身者意識調査報告

10月21日、安芸郡海田町福祉センターにて、海田町国際交流協会主催の国際交流講演会が開かれました。この席で伊藤泰郎准教授と高畑幸講師が、ブラジルやペルーなど南米出身の外国人住民を対象に行った意識調査の結果を報告しました。この調査は「地域国際化論」を受講する学生13名が、7月7日に海田町畝公園で開かれた夏祭り「かいた七夕さん」の折に実施。来場した外国人に声をかけ、アンケートに答えてもらう面接方式で行いました。102人から得た回答を集計した結果、回答者の半数以上が30-40代で平均滞日年数は10.5年。今後も海田町に住みたい、地域社会に貢献したいと考える人も多いことがわかりました。



福祉実習報告会の開催

去る11月21日、社会福祉援助技術現場実習「実習報告会」を開催しました。夏季休暇中に約1ヶ月間、特別養護老人ホームや児童養護施設、知的障害者更生施設、知的障害者授産施設、社会福祉協議会などで実習を行った3年生が、それぞれの経験について語りました。利用者とのふれあいの様子や心に残ったこと、援助技術を実践することの難しさ、後輩へのアドバイスなどについて、しっかりと自分の言葉で話してくれました。多くの聴衆の前でも落ち着いて報告している姿は、とても頼もしいものでした。



ビジネス・インターンシップ研修報告会

一般企業から研究機関等、バラエティに富んだ研修先での仕事を体験した5名の学生による「ビジネス・インターンシップ研修」の報告会が11月22日開催され、準備段階から、実際のインターンシップ研修までの体験が熱心に語られました。仕事の大変さや面白さを認識すると共に、研修をやり遂げた達成感や将来への大きな自信につながったようです。



高城祭にフシゼミ生出店

今年の高城祭に現代社会学部からは1年生が中心となって参加しました。「社会学プレゼミナール」の中でミーティングや看板制作の準備などを進め、屋台で牛丼、チョコレート・フォンデュ、お茶の販売を決定。牛丼は予想以上に人気で、スタッフは熱々の牛丼を盛り付けるのに大忙し。おかげさまで二日間とも完売しました。学科対抗クイズには、奥歯秀樹准教授、岩下佳二郎君、高山昭彦君が見事なチームワーク(?)を發揮。難問・奇問をクリアし、見事優勝! 1年生諸君には、この勢いで今後も活躍してもらいたいものです。最後に、ご支援を頂戴しました1年生担当(チューター)の先生方をはじめ、多くの教職員の方々に御礼申し上げます。



卒業生が製作

インテリジェント・レーシングカー

広報委員会 益永 茂治

9月30日に本年最後のオープンキャンパスが開催され、珍しいレーシングカーが実習場前に展示されて来場者の目を引きました。夏明講師の紹介でお目見えしたこの車は、現在島根県在住で本学を92年に卒業した大谷竜三氏が、常務取締役として渡洋自動車整備工場に勤務するかたわら、2001年から3年がかりで製作した量産車改造レーシングカーです。

FF方式の三菱ミラージュをベースとしながらも、三菱ランサーのターボ付縦置きエンジンを運転席シート後方に搭載。運動性能に優れたミッドシップ配置を採用しています。さらに駆動系はフルタイム4輪駆動方式に変更し、ボディは運転席後方から切断、パイプフレームで骨格を作り、リヤ・カウル(覆い)を新設して被せた構造となっています。この駆動系は、複数の量産ユニットに改造を加えながらこれらを巧みに組み合わせた独特の配置となっています。さらに給排気系ダクトやパイプにはレースを知り尽くした数々の工夫が見られ、最高出力：380PSを発揮するなど、自動車に詳しい本学の教員も舌を巻く素晴らしいマシンです。



パイプフレーム、エンジン・駆動系と給排気系の外観



大谷竜三氏の手になるレーシングカー

単に車が好きだからといって出来る訳ではなく、夏明講師によれば「知恵と技量がマッチした匠の技」だからこそ完成された傑作です。まさしく自動車短大卒業生ならではの理想を行くインテリジェントなクルマと言えましょう。訪れた高校生や保護者も、卒業生の実力に感銘を受けたようでした。

第1回学生交流会開催

生活指導委員長 越智 三千彦



戦い済んで和気満々、元気な学生たち

昨年までの「下宿生交流会」を全学生に拡大し、日頃の授業とは異なる面で学生同志、また教職員との交流も深めて、学生生活をより実り多きものにしようとの機運が盛り上がり、このほど第1回学生交流会の開催にこぎつきました。10月27日(土)、秋晴れの好天の下、上瀬野キャンパス内にある陸上競技場を会場に集合。学長・短大部長以下教職員も加わって総勢約60名、この種の行事としては近來にない多数の参加がありました。第1部のソフトボール大会では、教職員1チームを含めて自由参加の1・2年生3チームの計4チームで、トーナメント方式により行われました。熱戦のなかにも好プレーや珍プレーも続出し、あちこちで笑い声上がるなど終始なごやかな雰囲気。最終的に2年生Aチームが優勝して、先輩の面目を保ちました。

試合が終わると第2部はいよいよ待ちに待ったバーベキュー大会。試合でお腹を空かせた学生達が3基のコンロに群がり、前日から教職員有志が手分けして準備した肉や野菜もアツという間に平らげられましたが、学生も教職員も一体となって語り合い食べ尽くした楽しい一時となりました。

その後、まだ飽き足らない学生達は互いに誘い合って新たにチームを編成し、再びソフトボールに興じるなど、学生パワー全開の1日となりました。この成果を受け、新入生が友人を作り学校の雰囲気早く溶け込めるよう、来年はできれば入学式後に全員参加で行えればとの声も上がっています。新年早々から具体化に向けて計画して行きたいと思っています。



秋空の下、楽しいバーベキュー

高校 から発信

10月18日深夜、新幹線から降り立ったイギリス姉妹校(Beckfoot School)一行はとても身軽に見え、たいへん驚きました。なんとメアリー先生と男子5人のスーツケースが他の便に紛れて出てこなかったとか。翌朝、制服で歓迎朝会に出るはずだった一行は、急きょ私服での登場となりました。



黒猫のお守り

姉妹校として20冊ほどのペーパーバックに加え、本校が今年創立80周年を迎えたことを祝う記念の盾もいただきました。1万キロの距離を一気に縮めて、ほのほのとする瞬間でした。また、初の全国大会出場を果たした吹奏楽部のために黒猫のお守りも持ってきてくださいました。吹奏楽部のメンバー一人一人に小さな黒猫のお守りが渡され、みんな歓声を上げて大喜び。お守りを手に素晴らしい演奏をすることができました。



書道体験

授業中や昼休み、休憩時には気軽に声をかけられ「まるで芸能人にでもなった気分だ」と言い出すイギリス人生徒もいたほどでした。広島城天守閣からの眺めに驚き、護国神社や三原の仏通寺、尾道の千光寺では日本人がどのように宗教と接し、暮らしの中に宗教が息づいているかという素朴な疑問への答えを見つけました。



広島城に遠足

家庭では、スリッパを履き、さらにトイレでまたスリッパを履き替える習慣に驚き、日本食をいろいろ試している姿が印象的でした。自動販売機にもすぐに慣れ、日本にしかないジュースやお茶を飲んでみて、とてもおいしいとうらやましがっていました。全員が口を揃えて言っていたのはホストファミリーのもてなしの素晴らしかったことと食堂の料理がおいしいことで、特に唐揚げが大人気でした。

広島での最後の朝は離ればなれになるのが辛く、新幹線の発車ぎりぎりまで別れを惜しみました。

ホストファミリーの皆様、本当にお世話になりました。



お好み焼きをテイスティング

英国姉妹校来訪

9月30日(日)、天気曇り。連日の残暑に悩まされ続けた関係者に最高のコンディションがもたらされました。朝8時、1人目の中学生を皮切りに県内各中学校から続々と生徒、保護者が来校。体育館では在校生代表、卒業生代表がスピーチを行い、紹介ビデオを上映するなどしました。その後、公開講座・実習を見学し、昼食時には本校自慢の学食も全員に体験していただきました。

参加者数は実に1,600人(そのうち保護者160名)を超え、昨年を上回る過去最多人数を記録。10時から13時ごろまで校内は人の波でごった返しました。来校者を800人ずつ2組に分け、全教職員、応援生徒230人で懸命に接待したのですが、余りの多さに行き届いたもてなしができませんでした。

オープンスクールは次年度入試を占う重要な行事と各学校とも認識しています。ここ十数年、本校の受験者数は広島県内の高校では常にトップクラスですが、少子化の続く来年度以後も入学者を維持していくためには、教職員一体となって優れた教育作りに邁進しなければなりません。



ハングル講座を見学中

参加生徒感想文

僕はオープンスクールに行って、さらに国際学院高校に進学したくなりました。校舎もきれいだし、先生や先輩方がわかりやすく接してくださり、楽しく校舎内を回ることができたからです。

クラブは野球部を体験しました。僕は野球が大好きで、クラブ体験も楽しみにしていました。体験を終えて、絶対に硬式野球部に入って勉強とクラブを両立させ、監督さんや先輩たちと甲子園を目指したいと思いました。

熊野中学校 山中 正明君

過去最多の参加者

オープンスクール開催

修学旅行

本校の修学旅行は国内、海外各2方向を生徒個人の希望で選択させ、2年次の10月に実施します。今年度は北海道、沖縄、中国、韓国に出かけました。生徒たちの希望は北海道が圧倒的に多く、今年も2学年全体の約75%でした。

中国

普通科2年8組 久保西 隼君

北京空港に降り立ち見上げた空は日本で見慣れたのと同じで、世界のつながりを感じました。世界遺産の天安門・紫禁城・天壇公園と、全てにスケールが大きく歩き疲れました。一番楽しみにしていた秀水市場では値切りのスリルを味わい、北京の大学教授のご指導で太極拳も体験しました。万里の長城の巨大さはやはり「感動」そのものでした。

中国雑伎の観賞、北京動物園でのパンダとの出会い…山ほどの感動で、中国の魅力の虜になりました。後輩の皆さん、自分の目で確かめてください。



万里の長城をバックに



海の中は快適です

沖縄

普通科2年3組 新本 博子さん

澄んだ空、透き通った海。初めての沖縄は全てが輝いて見えました。

ひめゆりの塔では心が痛み、改めて戦争の怖さを知りました。琉球村、万座毛、水族館等を巡り、とても楽しかったです。ダイビングは最初不安だったのですが、海の中が言葉にならないほどきれいで、見た瞬間怖さも吹っ飛びました。夜はバーベキューに舌鼓を打ち、地元の小中高生のエイサーを見るなど充実した時間を過ごしました。

沖縄に行ったことは大変良い思い出となりました。またいつか訪れたいと思います。

北海道

引率教諭 久保 敏彦

今回は夜行寝台列車で日本列島を東半分縦断する雄大な始まりでした。三段ベッドの狭い空間も何のその、生徒はカードゲームに興じたり、楽しく話したりと結構充実した一夜を過ごしていました。函館の朝市では蟹やメロンを買い込み、五稜郭タワーや函館山の夜景に感動。リンゴ狩りで採れたてリンゴにかぶりつくという野趣溢れる体験を楽しみました。いよいよメインイベントのラフティング、生徒たちはたちまちその魅力にとりつかれ、一番の思い出となったようでした。



こぼれる笑顔「ラフティング」



「やっぱり韓国は料理ですね」

韓国

引率教諭 植田 康代

カルビ焼き肉・プルコギ・うどんすき・石焼きビビンバなど韓国料理を堪能した一方で、日本食への恋しさも日毎募っていったようです。異文化と触れ合った5日間、友人や家族が自分にとってどれだけ大きな存在であり、普段の生活がいかに豊かであるものか改めて実感したのではないのでしょうか。また、最初は敬遠し合っていた普通科と総合システム科の生徒たちが、互いに友情を深めていく様子にも旅行の成果がうかがわれます。最後にはバスの中で歌うほど盛り上がった韓国メンバーの笑顔が印象的でした。

創立祭

11月17・18日、大勢の来校者を迎え「創立祭(第46回文化祭)」を盛大に挙行了しました。

初日には体育館で2学年による「プレゼンテーションコンテスト」が初めて行われました。「かけがえのない地球のために～高校生として今できること～」という創立祭のメインテーマに沿い、各クラスがそれぞれに選んだ世界の国について調査研究したことを発表。予想をはるかに上回る素晴らしい出来映えでした。創意工夫を凝らした研究成果が次々に披露され、本校生徒・教師の意欲と実力を再認識しました。

翌日は心配された天気も徐々に回復、気温はやや低いものの絶好の

「創立祭日和」に恵まれました。1学年による恒例の「合唱コンクール」が行われ、超満員の体育館で各クラスが努力の成果を発表しました。各教室ではクラス・クラブの展示が来客の目を引き、中庭・西側通路には様々な露店が建ち並び、生徒たちの食欲をそそっていました。生徒たちには生涯忘れられない思い出が作られた2日間となりました。



創立80周年を記念し作られた飾りはペットボトル製

町民グラウンドゴルフ大会開催

昭和20年、原爆により灰燼に帰した本校は翌年、広島市から今の海田町に移転しました。爾來60年、ここから30,000人を超す卒業生が巣立っていきました。その間地元の方々にどれだけお世話になりましたか、またご迷惑をおかけしたか、筆舌に尽くしがたいものがあります。

本学院の創立80周年を記念し、現在までお世話になったことへの感謝とともに、本校は今後も地域と共に在りたいとの思いを込め「海田町民グラウンドゴルフ大会」を企画。創立祭に合わせ、11月18日(日)に開催しました。

当日は海田町内の各自治会から25チームが出場し、総計150人による熱戦

が繰り広げられました。普段は野球部などが練習に用いるグラウンドは整備も万全で「いつもよりプレーしやすい」と参加者に大好評。同規模で行われる通常の試合を大きく上回る38個のとりまり*を記録しました。優勝は砂走自治会チームでした。閉会後には参加者から「創立81周年大会も是非開催して欲しい」との声もありました。

開催に当たり、海田町体育指導委員協議会の皆様に大変なご尽力をいただきました。



最年長で2つのとりまりを出し、個人準優勝に輝いた伊藤初江さん(稲葉自治会)



とりまりも続出した好ゲーム



優勝した砂走自治会チーム

※とりまり……ゴルフでいうホールインワンのこと

全日本吹奏楽コンクールに初出場



高校吹奏楽部 顧問 中島 洋治

2007年8月25日、鳥取県倉吉市で全日本吹奏楽コンクール中国大会が開催され、本校吹奏楽部が念願の全国大会への切符を手に入れました。中国地区各県より4校(開催県は5校)が代表として出場し、21校から全国大会へ進めるのは上位3校という狭き門を、今年初めて突破したのです。高等学校の部は全国から29校が出場できます。この大会に出ることを目標に、全国の吹奏楽部員は厳しい練習を休みなく行ってきました。全てをこの瞬間に賭け、これまでやってきたわけです。

東京普門館は噂通りとても広く、メンバーは緊張した面持ちで本番を迎えました。何年も連続で出場を果たしている常連校は、会場に乗り込んで来る時の様子さえ自信に満ちあふれ、きびきびと楽器の積みおろしをしています。チケットは発売と同時に売り切れ、当日券もないほどの人気。各県から応援の保護者やOB、そして吹奏楽ファンの人たちが集まり、会場は超満員です。そんな中、本校の演奏が始まりました。

今年の本校の課題曲は「マーチ『ブルースカイ』」、自由曲はプロコフィエフ作曲の「バレエ組曲『シンデレラ』」。全国大会ともなると、揺るぎないハーモニーとリズムでミスなく演奏することはもちろん、繊細な音楽表現と高い演奏技術が必要です。大勢の観客やステージの広さに圧倒されることなく、いつも通りの軽快なマーチを会場に響かせることができ、また「シンデレラ」の情景を表現できていたと思います。結果は銅賞でしたが、吹奏楽部の歴史にまた新たな1ページが加えられました。これからも人に感動を与えられる演奏を目指してよりいっそう精進していきたいと思っていますので、よろしくお願いいたします。

青 BLUE

—第40回高城祭—



ビンゴ大会では豪華な景品に大はしゃぎ

高城祭実行委員会 秋元 孟^{たけし}

10月27、28日に高城祭を行いました。今年のテーマは「青」。信頼、希望、誠意、安全、成功など青という色のさまざまな良いイメージを高城祭に持たせたいという思いから選びました。今年学院創立80周年にあたる上、高城祭も第40回という節目の年で、例年以上に大学全体を巻き込んで盛り上げていこうと意気込んでいました。企画にもこれまで以上に力が入り、新しいイベントを催すなどしました。

例年は終夜祭にしか行わなかったゲストライブを前夜祭、終夜祭共に行ったのに加え、図書館前にもサブステージを設置して、学内外の様々なバンドの方に演奏してもらいました。またバザー店については、



バイオ・リサイクル学科のバザー店

各サークルに加えて各学科も今回初めて出店。バイオ・リサイクル学科が名物？のおからクッキーなどを販売し、情報デザイン学科は映画上映会を開くといった具合で、それぞれの特徴をよく活かしていました。皆さんが頑張ってくれたおかげで大盛況でした。恒例の花火も例年以上に盛大に打ち上げ、来場者の方々に楽しんでもらえるよう精一杯努力したつもりです。

ステージ製作やテント設置など、大勢の人達からの協力がなければ期間内に間に合っていなかったでしょう。先輩方が引退して、来年どうなるかまだわかりませんが、できる限りのことをして頑張っていきたいと思います。今年の高城祭にご来場くださった皆様、本当にありがとうございました。来年もよろしくお祈りします。



盛り上がったステージ企画

秋田国体で見事準優勝！ 自転車競技部・野中君

自転車競技部顧問 河本 和成

9月30日、自転車少年男子ロードレースが行われた国民体育大会(秋田)第2日目。最初の決勝レースということもあって報道陣等の注目も集まる中、野中竜馬君は持ち前の積極的な走りが出ていました。序盤から先頭集団を引っ張り、中盤に何度もアタックを仕掛けリズムを作る。相手の様子を見ながらラスト1周で再度抜け出す。ゴールまで残り10km、先頭集団は4人というアナウンスが入ると、広島県選手団全体が一気に盛り上がりました。最後のゴールスプリントは壮絶でした。結果は僅差で見事第2位(1着と同タイム)。広島勢に大きな勢いをつける内容でした。

大会第5日目の10月3日、自転車少年男子ポイントレースでは、彼の更なる飛躍が感じられました。予選で着実に得点を重ねて決勝進出。決勝では序盤に得点を獲得し、中盤には集団から抜け出し、独走して得点をあげる場面も。何度もアタックを仕掛けて抜け出し、得点を狙う走りは圧巻でした。終盤にも再度アタックを仕掛けるなど、持ち味を存分に発揮して第3位に入賞しました。秋田国体は彼に大きな成長と自信をもたらしたことでしょう。



野中君

講演会 ヒロシマの継承 —原爆のつめ跡をみつめる—



葉佐井先生の講演

地域共同教育研究センター所長 佐々木 健

「ハチ・ロク、って何かよう判らんことを言よった。蜂の巣のことか?」「原爆資料館?行ったことない」「8時15分?何のこと?」「原爆?何か昔の爆弾じゃろー」…こういった会話を広島若い人、学生の間から聞くことがここ数年急に多くなりました。多くのマスコミ報道がされた被爆60周年から数年が経過し、小中学校でも平和教育は減少。被爆者も高齢化が進み、「悲惨な体験」がさらに風化しつつあります。より危機感を感じるのは、教育の一環として平和の尊さを深く教わり、命の大切さを肌で知る団塊の世代やその後の世代の人たちの間にも、原爆を伝えることに諦観と虚しさが漂っていることです。世界中に戦争は絶えないし、平和を守り続けたわが国もこのままではどうでしょうか?

当センターは、広島の地域社会に貢献するという立場から「ヒロシマの継承」講座を企画しました。本学は200名以上の中学校、高等学校教員を輩出してきた教育大学の一面もあり、平和教育を継承することは使命だとも考えています。幸い本学にはそれぞれ専門の立場から原爆や平和を検証している教員が身近におられます。

第一回「ヒロシマの継承」講座は、去る12月3～5日に開催されました。3日は北川建次前地域共同教育研究センター所長が「知られざる原爆遺跡」として、被爆者でありかつ地理学を専門とする立場から、主に広島駅周辺や二葉山に残る被爆建造物、橋など貴重な遺跡を紹介し、保存と継承の重要性を説明されました。4日は私が「ヒロシマと水—原爆献水は今」として、環境破壊により市中16ヶ所の原爆献水の水質汚染が進行し、ヒロシマの「心」が継承できていないことを報告しました。5日は葉佐井博巳前学長が「原子爆弾と放射線」と題し、広島型原爆の物理学、放射線の量、被ばく線量と被爆者の位置関係などを、被爆者として、また放射線物理学の立場から講演されました。

本学学生を含め第一回としてはまずまずの受講者を集め、多くの人が原爆被害のすさまじさを改めて認識しました。とりわけマスコミには注目され、中国新聞と毎日新聞から取材を受けました。広島としてこれらの「継承」を必要かつ重要視していることを知らされました。

「継承」は「継続」が重要です。今後2～4回、上記講師を始め「原爆語り部」の方をも交え、悲惨な体験とともに学術的立場からの「ヒロシマの継承」を続けていくつもりです。



北川先生の講演

連続講座 「情報社会とメディア」 —朝日新聞広島総局と共催—

新聞、テレビ、インターネットにケータイ…さまざまなメディアの特性を理解し、メディアが伝える情報を自主的に判断し、活用する能力を身につけることが重要になってきています。朝日新聞広島総局との共催で、連続講座「情報社会とメディア」を立町キャンパスにて去る11月17日から4週にわたり開催しました。

日時	タイトル	講演者
第1回 (11/17)	「テレビと新聞、二つのメディアを通して」	加藤 千洋氏 (朝日新聞編集委員)
第2回 (11/24)	「情報技術で変遷するメディア：ケータイ」	神垣 太持 (本学情報学部講師)
第3回 (12/1)	「メディアの平和報道」	白石 憲二氏 (朝日新聞編集局員 大学交流担当)
第4回 (12/8)	「情報ゴミと広告」	迫 勝則 (本学現代社会学部長)



加藤千洋氏の講演

★ 今後の主な行事予定

大学・短大 授業開始 (工・情・短1/7 現1/9) 学内合同企業セミナー (大2/1~2)
 会社説明会 (短2/1~2.4) 一般入試 ([前]大2/3~4 短2/3 [後]3/8)
 保護者懇談会 (短2/16) 卒業式 (3/19)
 高校 授業開始 (1/7) 献血 (1/15~16) 推薦入試 (2/4) マラソン大会 (2/11)
 一般入試 (2/19~20) 卒業式 (3/1)

高校生以上の方に図書館を開放しています。 詳細は図書館までお問い合わせください。 TEL 082-820-2536

この広報誌はホームページでご覧になれます。 <http://office.hkg.ac.jp/~kikaku/kouhou/>